

自由意志の「向こう側」としてのスピノザの 自然主義プログラム：青山拓央氏の「無自 由」概念との対照を手引に

KIJIMA, Taizo / 木島, 泰三

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

13

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

2022-12-29

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030895>

自由意志の「向こう側」としてのスピノザの自然主義プログラム

— 青山拓央氏の「無自由」概念との対照を手引に

木 島 泰 三

本稿は、拙著『自由意志の向こう側——決定論をめぐる哲学史』（木島二〇二〇年）で提起した、あるいはその背景にあったいくつかのトピックを取り出し、同書の「基礎論」とでもいうべき、拙著『スピノザの自然主義プログラム——自由意志も目的論もない力の形而上学』（木島二〇二一年）についても視野に入れながら、同書で論じきれなかった論点をより明確にしたい。同時に、副題にも掲げたように、この考察の位置づけを探るために、青山拓央氏の『時間と自由意志』（青山二〇一六年）を我田引水的に参照してみたい。

一 スピノザの自然主義プログラムの二本柱

—— 目的論的自然観批判と自由意志説批判

スピノザは『エチカ』第一部付録で、人々がスピノザの必然主義を受け入れない大きな理由として、（現代の一般的な呼称を用いれば）目的論的自然観があり、この目的論的自然観を「自由意志」という錯覚と共に人々に深く根付いた偏見と見なし、批判する。筆者はこのような偏見への批判の企図を「スピノザの自然主義プログラム」と呼ぶ。ここで改めて定式化し直せば、それは、人々が本性的に陥りがちな偏見あるいは wishful thinking の根底に、自由意

志と目的論の共犯関係を突き止め、例外なき必然主義と没目的論の原理に照らしてその種の偏見を打ち消していく企図、ということになる。

筆者はここで、〈必然主義による自由意志説批判〉と〈目的論的自然観の批判〉という二様の批判的企図が、切り離されずに一体のものとしてなされている、という性格に重要性を見いだしている。

例えばデモクリトスのな決定論を前にした人は、しばしば、他であり得たかもしれない眼の前の「唯一無二の世界」が他でもなくこれであった「意味」や「目的」を思い描き、そこに超越者の意志や「運命」を読み取ろうとする。ストア派やライプニッツはまさにこのような考察から決定論と目的論を結びつけ、「この世界の最善性」を主張する。しかるにスピノザの自然主義プログラムの目的論批判は、決定論や必然主義がもたらし得るこのような偏見を退け、この世界が他でもなくこの世界であるという唯一無二性を定めているのは未来の最善性を配慮する目的論的原理ではなく、所与の、あるいは現在に先立つ、非人格的な法則、前提、諸原因である、という現実をつきつける。

目的論的自然観の支持者は、このような必然主義に「盲目の偶然」を見いだし、それを嫌悪する。一つの例はプラトンの『テイマイオス』に見いだされる。そこでプラトン

は、今風に言えば宇宙の「インテリジェント・デザイナー」たるデミウルゴスに抗う原理としての、デモクリトスの決定論的宇宙を暗に想定した「必然（アナンケー）」を位置づけ、「理性の助けを借りて、立派なもの、善いものを制作する原因」と対比されたそのような「必然（アナンケー）」を「思考を欠いてただ出まかせのものを無秩序に、その時その時に作り出す原因」（四六〇―四、プラトン一九七五年六九―七〇頁）と呼び、別の場所ではそれを「彷徨する種類の原因」（四八〆、前掲訳書七二頁）とも呼ぶ。現代の解釈者はそれを、「無秩序の源泉としてのランダム性または偶然（テュケー）」に等しい」（Carone 2005, p.37）、あるいは、「偶然としての盲目的必然」ないし「偶然性という意味での必然性」と特徴づける（シェーパーマン／レーヴ一九八七年三〇頁）。同じ方向の批判は、ライプニッツによるスピノザの必然主義批判においても見いだされる。それによれば、予定調和的な目的論を認めないスピノザの神的必然性は「幾何学的で盲目的な必然性」であり、「むき出しの必然性 *necessary brute*」である（『弁神論』三五一、ライプニッツ一九九一年一〇一頁。邦訳では「獸的必然性」。この「盲目的」や「むき出しの」とはまさに、目的とは無関係に、所与の前提と諸原因と諸法則のみから幾何学的、機械的に諸結果が帰結するという必然

性のありかた、すなわちその没目的性を指しており、この没目的性こそ、プラトンがデモクリトスの「必然 \equiv アナンケー」を「でたらめ」と呼んだときの核心に置かれていた意味である。

だが、このような世界の「偶然性」の強調、あるいは運命 \equiv 目的の否定は、必然的な秩序そのものの否定と見なされるべきとき、エピクロス主義の「原子の逸れ」や、あるいは現代のケイン (Kane 1986) に代表される「量子論的なりバタリアン」のような、非決定論とそれに基づく自由意志を呼び寄せる。しかるにスピノザの自然主義プログラムの第二の柱、つまり必然主義は、ここでのこのような誘惑と誤認を矯正する役割を果たす。

ここで有益と思われるのは、九鬼周造「偶然性の問題」¹⁾「仮説的偶然」の三つの下位区分の内の二つである「因果的偶然」と「目的的偶然」の区別である。つまり、デモクリトスやスピノザの自然観が目的論者たちから「偶然」の容認のことで批判されるとき、そこで言われている「偶然」は「目的的偶然」なのであって、これは万事が物理法則によって決定されているという「因果的偶然の否定」と両立するのである。

この点と関連して注記しておきたいのは、目的論的自然観に最終的な打撃を与えたダーウインの自然選択説が依拠

する「ランダムな変異」はまさに「目的的偶然」であり、それは必ずしも、エピクロス主義の「逸れ」や現代の量子論が導入する非決定論的な過程である必要はない、ということである。

この点に関しては、ジャック・モノーのような現代の進化論者の中にも幾分の混乱があるように見受けられる。モノーは、ラプラス的な決定論が成り立っている、それゆえ偶然の余地の存在しない世界においてはダーウイン的進化は不可能である、と主張するが(モノー一九七二年一三五頁)、ダニエル・デネットが批判しているように、ここには短絡がある(デネット二〇二〇年二一九頁)。筆者なりに整理すれば、「偶然」とは必ずしも非決定論的な「因果的偶然」を意味するわけではなく、そこに必要なのは「目的的偶然」で十分だということである。

エピクロス主義者であるルクレティウスも、スピノザも、動植物の構造を含む自然の合目的性という認識そのものに懐疑的である。例えば両者とも、目は「見るために」与えられているという説明を目的論的な偏見として嘲笑する(ルクレティウス一九六一年、第四巻、八三六―八四二節、一九二頁、スピノザ『エチカ』第一部付録)。このような認識は、ダーウインの後知恵をもってみれば、生物界の合目的性の認識に不十分なところがある。目の構

造は光学的装置としての「設計」という観点からの説明が可能であり、そのような説明を求められて然るべきである。それゆえにデザイン論証をはじめとする目的論的な自然理解は長きに渡り説得力をもち、エピクロス主義やスピノザのような徹底した反目的論は広い支持を受けなかったのだ。しかしながら、まさにその「盲目の偶然」＝目的的偶然を基礎にした自然選択説が見かけ上合目的であるような自然現象の非目的論的説明を提起したときに、エピクロス主義やスピノザの立場の根本的な正しさが明らかになったと言えよう。つまり自然が根底において目的論的原理を含まないという認識をあくまで徹底させた点では、ダーウィン主義はあくまで彼らと同じ側に属しているのである。

ダーウィン以後に目を向けるなら、自然選択説の登場によってデザイン神学が衰退して以降も、生気論的思想と結びついた目的論的自然観はなおも残存したと見られる（これは拙著では「非ダーウィンの進化論」と「歴史主義的決定論＝目的論」の共依存関係として指摘しておいた）。生命現象の機械論的な把握の見通しが本格的に立つのが二〇世紀半ばの「進化の総合説」の成立とそのしばらく後の分子生物学の発展の時期以降であり、一九七〇年代末から八〇年代にかけての「社会生物学論争」を経て、進化心理

学や進化倫理学のような学を筆頭とする人文・社会科学へのダーウィンの、つまり機械論的な生命理解・人間理解の浸透が進行し現在に至っている。

このような状況の中で、自由意志と目的論という思想の共犯関係を共に暴き、退けるスピノザ的な自然主義プログラムは依然として有効な手引となっている、と筆者は考える。次にこの点を詳しく見ておこう。

二 スピノザの自然主義プログラムから見た 現代の自由意志問題

自由意志と目的論の共犯関係の暴露、というスピノザの自然主義プログラムは、現代における錯綜した「自由意志論争」ないし「自由意志と決定論」問題を読み解く際にも有益な手引になる。

最初に明確にしておく、筆者は「自由意志と決定論の問題」とは、基本的に過去の問題であると認識している。「自由意志と決定論の問題」は、基本的には一七世紀以降の機械論的世界像が決定論的世界像を肯定してきたことを背景にして重大になった問題であるが、その後物理学において、量子論の知見に依拠した非決定論的世界像の優位が確立している、という状況を踏まえるならば、この前提の

相違は看過すべきではないからである。少なくとも、物理学者渡辺慧氏の次の考察が適切である限り、単にミクロな相互作用のレベルだけでなく、可視的でマクロな意思決定のレベルにおいてすら、決定論的世界像はすでに維持できなくなっていると判断してよい、と思われる。

一キロ先の赤信号の光子の一つ二つが眼球にはいるか、はいらないかは、量子論的不確定性の故に決定しないことが十分ありうる。ところが、人間の眼は、一つ二つの光子も感じるものが知られている。赤信号の光子が眼にはいれば、列車の運転手はブレーキをかけない、光子が眼にはいらないければブレーキをかけないということは充分ありえます。その結果、言えることは、何百人の生命の生死が、量子論的不確定性で左右されることとなります。(渡辺一九八〇年一八六頁)

これは、現代では「複数の未来への分岐」の可能性、しかも単なる論理的な可能性ではなく、物理的な可能性が、マクロな意思決定のレベルにおいてすら肯定されている、ということを示すものと理解できる。従ってまた、(物理法則は単線的でただ一つの世界経過しか許容せず、物理法則を踏まえる限り世界の経過は他ではあり得なかった)とい

う古典的な決定論的世界像は、現代では否定されているか、少なくとも非常に問題含みなテーゼでしかなくなっていると考えてよい、と思われる。

物理法則がある時点以降の未来の経過として唯一の単線の経過のみを許容するのか、それとも複数の「枝分かれ」の余地を認めるのかという問題、そして専門知の趨勢が前者から後者へ移行しつつあるという状況はそれとして重要な形而上学の問題であり、これについてはこの後立ち戻る。しかしここでより重要なのは、この認識を踏まえるとき、伝統的な「自由意志と決定論の問題」が必ずしも「決定論をめぐる問題」ではなかったのではないか? という可能性がそこから見えてくる、という点である。

ここで要となるのは、物理学におけるこのような決定論的世界像の否定が、直ちに「自由意志と決定論の問題」の反決定論サイド、つまりは決定論と相容れないタイプの自由意志を肯定する「(哲学的)リバタリアン」に好ましい帰結をもたらすようにはとても思えない、ということである。これはしばしば指摘される論点だが、やはり大きな問題であり、筆者の関心にも深く関わる点なので、詳しく見ておきたい。

この問題を率直に捉えるためには、まずは量子論に基づく非決定論的宇宙像というビジョンが開かれる前の段階

で、非決定論的宇宙像についてどのようなイメージを抱か
れていたのかを見ておくのが有益である。そしてウィリア
ム・ジェイムズの二〇世紀初頭の講演はまさにその典型を
例示している。

人間の未来を意志する働きは、事実上、あいまいな
〔非決定論的な〕ことがらであると信じられそう
唯一の事柄である。(ジェイムズ一九六一年二〇二頁、
訳語一部改変)

つまりジェイムズは、人間の意志の働きこそが、この宇宙
に見いだされそうな唯一の非決定論的な働きである、とい
う考え方を当然のように前提している。このような見方が
一般的であったと考えてよければ、二〇世紀の物理学は、
それまで見込まれていたところとはまるで別のところか
ら、予想外の形で、決定論的宇宙観に疑問を投げかけた、
ということになる(それが古代以降一貫して支持者を広げ
たことのない「エピクロスの逸れ」と奇妙に類似し
ているのは、この全体的傾向の例外である)。だとすれば、
それがかつて非決定論に期待されていた役割を思うよう
果たせずにいることもまた、納得できる。

量子論的な非決定性は端的にランダムな過程であり、行

為者が「意のままに」コントロールできるような過程では
ないという点で、(哲学的)リバタリアンが求めている自
由意志の非決定性からは逸脱している。それがどのような
逸脱であるかはこの後考察するが、ここで、現代のリバタ
リアンたちがこのような非決定性を自由意志の必要条件で
はあっても十分条件とは見なしていない、という点に注目
することがまずは必要である。

例えばロバート・ケインは量子論的非決定論に依拠した
(哲学的)リバタリアニズムを提起するが、そこで単なる
非決定性のみによって理解される「エピクロス主義」と自
らの立場を慎重に区別する(Kane 1996, pp.170-1)。そし
てこのようなケインが「自由意志」をどのように定義して
いたかを見ていくと、そこには単なる「決定論からの自
由」という、(バーリンの用語を借用すれば)「消極的自
由」に留まらない、「積極的自由」概念が理解されている
ことがわかる。それによれば、「自由とは、自分自身の目
標または目的の創造者であり維持者であることができる
という行為者の諸能力」(Kane 1996, p.4)である。つまりケ
インは「自分自身の目的の創造者かつ維持者であること」
への能力として、自らの自由ないし自由意志概念を定位置
している。あるいは、もう一人の代表的なリバタリアンであ
るE・J・ロウも、人間の意志が因果的閉鎖性(causal

closure) をはみ出す能力、つまり「自発的力 (spontaneous power)」であることを放射性情質の崩壊を引き合いに出して論じ、この点で意志の「消極的自由」を確保しつつ、さらに意志とは「合理的力」であり、しかも、単に「理由に適切 (in accordance with reasons)」働くだけでなく、「理由のために (for a reason)」働くことができる能力である、という点にその積極的性格を認める (Lowe 2008, pp. 155-6, 176-7)。ここでロウが「積極的自由」と呼べるものの根拠としている「理由」ないし「理由のために」という概念もまた、望ましい未来の目的と解される (cf. ibid. ch. 10)。

このような現代の (哲学的) リバタリアンたちの自由概念を見ていくと、彼らが真に希求しているものは、未来の望ましい目的を設定し実現し得るといふ積極的能力なのであつて、「決定論からの自由」といふ消極的な規定は、この積極的能力の実現を確保するための条件としてのみ求められている、と言つていいように思われる。

そしてここから、自由意志論争をどのように捉えるかについての、一つの視角が得られる。すなわち、自由意志とは一定の未来の目的を設定しその実現を目指すという目的論的な営みと一体不可分の能力であり、決定論はそのような能力を不可能にしてしまうと考えられる限りで問題とな

る、ということであり、近代の自由意志論争とは、近代科学が切り開いた決定論的な機械論的自然像の中で、人間のこのような目的論的能力をどのように位置づけるか、あるいはそもそもそれを保持できるかに関する問題、言い換えれば自然主義的人間理解の問題として理解できるだろうということである。

この認識を得ることで、自由意志論争について二つの見通しを得られるようになる。

第一に、この認識は、意志という能力をあくまでも目的の達成、あるいは広義の善の獲得と関連づけて理解しようとするという、西洋の「意志」概念のごくスタンダードな認識に立ち返ることにつながる。これは様々な技巧的な思考実験などにより本質的な問題が見えにくくなっている現在の自由意志論争の錯綜した状況を解きほぐす助けとなり得る。

そして第二に、自由意志が本質的に目的論的な能力である、というこの認識を得ることで、それを目的論的自然観の退潮と機械論的自然観の拡張という大きな流れの中に位置づけることができるようになる。自由意志とは、科学革命、および「ダーウィン革命」を経て退潮を続けてきた目的論的な自然過程の最後の砦のような存在なのであり、それが今や神経科学や進化論的認知研究の猛攻を受けつつあ

るといふのが現状なのではないのだろうか。そして恐らく同じ認識は、現代の行為論における「理由」と「原因」の関連付けをめぐる論争についても適用されるだろう。

この本質が見えにくかったのは、一七世紀に近代的な「決定論と自由意志」問題が問われ始めた時期、それがより伝統的な「運命論と自由意志」と呼ぶべき問題と重ね合わされてきたからだと考える。先ほどこストア派やライプニッツに関連づけて言及したように、神的な「予定 (predestination)」を含む講義の「運命」とは、ある定められた結末を目指して進むという意味で本質的に目的論的な過程であり、それゆえそこで問われているのは(神的予定について言えば)人間の自由意志という目的論的な働きと神の自由意志という目的論的な働きをどのように調停するかという問いかけなのであって、これは自然主義的な「決定論」と人間の自由意志の關係への問いとは区別されてしかるべきである。

自由意志、とりわけ、決定論と相容れないものとして理解されてきたリバタリアン的な自由意志とは、ある種の目的論的自然過程である、というその本質が明らかになることで、それがいかに維持し難い思想であるかがより明確になる。つまりそれは、ある人間の利害関心に照らして望ましい目的論的過程が、その人間にとって望ましいタイミング

と場所で、因果律を無視して発生する、という過程であり、自然的世界がこのような虫のよい構造になっているという見込みは皆無と言つていいであらうからである。

同時にまた、この図式に照らすとき、因果律と量子論的な不確定性は、目的とは無關係に進行する自然過程であるという点で、共に「目的的偶然」に属する過程として、目的論的なりバタリアンの自由意志と対立する過程であることが明確になる²⁾。それは、必然的法則のみならず純然たる因果的偶然をも含むという点を除けば、プラトンがデモクリトスに見いだした「アナンケー」の性格をほぼすべて受け継いでいる。

このような状況認識を踏まえて「自由意志問題」を見直すことで、従来気づかれにくかった状況の把握もできるのではないかと筆者は考えている。

三 青山拓央氏の『時間と自由意志』における「分岐問題」と「無自由」

ここで、表題に掲げた青山拓央氏の『時間と自由意志』を一つの比較として取り上げてみたい。実を言うと、この比較が明らかにする氏と筆者の立場の差異がどのようなものか、筆者には確信がもてていない。これは氏が最終

的に目指しているものを筆者が十分に把握できていないことと恐らく関わっている。とはいえ、氏の認識と筆者の認識には大きな一致点と無視できない相違点があり、その意味の検討を今後の課題としつつ、その一致点と相違点の確認をしておきたい（なお、注記しておけば以下は青山氏の著書のバランスの取れた紹介ではなく、筆者の関心に結びつけた論点を取り上げたものである）。

・「時間と自由意志」の大きな骨格

青山氏は「分岐問題」という問題を自由意志問題を考えるための導入に据える。分岐問題とは、我々の、複数の選択肢⇨可能な複数の未来の分岐点から一つの道を選択し、決定する、という営みを子細に見つめていくと、どの決定についても先立つ根拠が見つかり、最終的に「複数の可能な分岐」など存在しなかったか、あるいは、仮に分岐が存在しても、それはまったく無根拠な偶然的分岐でしかないか、この二つの「解」しか残らなくなる、という考察である。青山氏はこのような考察の果てに見いだされる自由意志の不可能性は「不自由」ではなく、「不道德 (immoral)」に対する「無道德 (amoral)」と同じような意味で「無自由 (afree)」である、とする。

・分岐問題について

冒頭で提起される「分岐問題」は非常に印象深い議論であり、いわゆる自由意志問題の導入方法として有用である。とはいえその実質は、「充足理由律」に基づく決定論、あるいは運命論の論証を、出発点を変えて提示したものに帰着する、と筆者は理解している。

古典的な因果的決定論は、ある時点の世界の状況から複数の未来が論理的に可能であるとしても、その中の唯一「他ではなくこの」因果系列のみが実現することの根拠を因果律が与える、という思想である。ここで因果的決定論は、複数の「枝分かれ」の可能性の中から唯一つを絞り込む原理として働いているという意味で「充足理由律」であると言える。これは因果的充足理由律と呼べるだろう。しかしこの原理は、宇宙の初期状態や自然法則が別様であったならば別の宇宙経過が成立していた、という論理的な可能性を残す。しかるにライプニッツが考える最善世界説は、宇宙の初期状態があれではなくこれであるという理由を創造者である神が現実世界を最善世界として選んだ、という想定に求める主張であり、そこでは「世界の最善性」という目的論的な原理が、複数の可能な世界系列の中から一つを選び出す原理として働いているということになる。

これは、因果的充足理由律をその上位で統制する、目的論的充足理由律と呼べるだろう。このような見取り図を与えたとき、量子論的不確定性は、目的論的充足理由律のみならず、因果的充足理由律にも縛られない偶然を導入するものと見られよう。またこのように見ていくと、ヴァン・インワージェン（二〇一〇年）の「帰結論証」は、充足理由律としての因果律に依拠した（自由意志の行使を唯一の例外とする）分岐不可能論と見られることになる。

・「無自由」とアナンケー＝目的論的偶然

また、氏の「単線的決定論か、さもなければ説明不可能な（＝充足理由を欠く）偶然による分岐か」という二様の解の果てに見いだされる「無自由」の概念は、筆者がデモクリトス＝スピノザ的な「必然（アナンケー）」と量子論的な偶然に共に見いだした「目的論的偶然」に最終的に意志という目的論的原理は基礎を置いている（それは例えば最終的に非目的論的な自然選択の過程に基礎づけられる）、という筆者なりの認識とよく一致するようと思われる。

氏は「無自由」を「自由意志と決定論」という対立の中にある「不自由」と区別する。かなり我田引水とは思いますが、筆者は、究極的に「目的論的偶然」に帰着する意志作用が、運命論的な、意図的エージェントによる「支配」では

なく、無人格的な決定である、という点に、「不自由」に對比される「無自由」と重なる性格を見いだせるのではないかと考えている。

古典力学で近似できるマクロな世界について言えば、充足理由律による決定論は依然十分に有効であり、ここではその充足理由律が「目的論的偶然」としての作用因に限定される、という点が重要である。世界の経過が単線かどうか、という点よりも、そこではまさにデモクリトス的な目的なきアナンケーが支配している、という点に、古典的な決定論による自由意志否定として「無自由」を見いだし得る。

但し筆者は、例えばリベットの実験から、いきなり根底的な「無自由」の境地に飛躍する青山氏の論述（一六二頁）に逆に危惧をおぼえる。生物の脳は自然選択の産物として高度な疑似・目的論的な動作を行う装置なのであり、我々の日常的な意思決定の場面では、根底の「アナンケー」が直に顔を出すことなく、無秩序を秩序化＝目的論化する装置が内的にも外的にも無数の層をなしている。

デネットは「意味論的エンジン」を永久機関になぞらえ、現実存在する機械はどこまでいっても「構文論的エンジン」であり、それが意味論的エンジンを近似ないし模倣しているに過ぎない（「効率のよい機械」は永久機関を

近似するが、真の永久機関は実現不可能である、ということと似た意味で」と論じる（デネット二〇一五年、第三章、二七九―八一頁）。人間の「任意の未来を設定しそれを任意に実現する能力」という能力は、ここでいう永久機関や意味論的エンジンに似た実現不可能なイデーに当たると思われる。進化や言語は「テレオロジカル・エンジン」に似たものを生み出すが、真の目的因が存在しないこの現世では、それらは、アナンケー的な物理的実在を寄せ集めて作られる、純粹なテレオロジカル・エンジン（超越的人格神やリバタリアンが夢想する人間に宿る自由意志がそれに当たると）の近似物に留まるのではないか、ということである。

この構造をポジティブな面から捉え直すこともできる。ダーウィン革命は目的論的自然観の最終的な廃棄であったと共に、「目的論的自然化」でもあった。青山氏はリベットの実験からいきなり無自由の世界へのジャンプするが、その間にはこの「自然化された目的論」の分厚い層が存在している、この層を無視しなければ、たとえ世界の実相が無自由（ないしアナンケー）に支配されているとしても、人間は無力で受動的な運命の奴隷でも、真空中で対生成と対消滅を繰り返す粒子のような「起こるままに起きる」だけの存在（青山二〇一六年一六四頁）でもない、と言い続

けられるだろう、と筆者は考えている。

《注》

(1) もう一つの「理由的偶然」の対応物をスピノザやラプラスの中に見いだす作業も『自由意志の向こう側』では行つたが、ここでは取り上げない。「離接的偶然」のような、九鬼のより深い洞察と結びついた概念もやはりここでは取り上げない。

(2) 筆者は『自由意志の向こう側』で、「何か『因果的偶然』である場合、それは要するに無法則的であらねな出来事であるのだから、『目的的偶然』つまり目的論的な観点から見ても偶然なものでもある方が一般的なのだ」と述べた（一〇四頁）。これはごく当然の推理であり、とりわけ量子論的な不確定性についてはよく当てはまる。しかしその少し前で、エピクロス派の「原子の逸れ」もまた「目的的偶然」である、と述べた部分には見直しが必要であったと気づいた。というのもルクレティウスは、原子の逸れが、生物が好ましいものを求めるために自由意志がまさに行使される局面で生じることを主張しているように思われるからである（ルクレティウス一九六一年、七三頁、第二卷二五六―六〇）。ということはそれは単に不確定で非決定的な、それゆえに摂理や運命（に等しいものと目された自然法則）に縛られないというだけではなく、積極的に目的論的な働きをすると目された、かなり強い意味でのリバタリアンの自由意志であることになるからである。

邦語・邦訳文献

青山拓央 二〇一六年『時間と自由意志——自由は存在するか』筑摩書房

ヴァン・インワーゲン、ピーター 二〇一〇年（原著初出 一九七五年）『自由意志と決定論の両立不可能性』小池翔一訳、門脇俊介、野矢茂樹編・監修『自由と行為の哲学』春秋社、二〇一〇年、一二九―一五三頁

木島泰三 二〇二〇年『自由意志の向こう側——決定論をめぐる哲学史』講談社

木島泰三 二〇二一年『スピノザの自然主義プログラム——自由意志も目的論もない力の形而上学』春秋社

九鬼周造 二〇一二年（初版一九三五年）『偶然性の問題』岩波文庫

シュペーマン、ローベルト／ラインハルト・レーヴ 一九八七年『進化論の基盤を問う——目的論の歴史と復権』山脇直司、朝広謙次郎、大橋容一郎訳、東海大学出版会

ジェイムズ、ウィリアム 一九六一年（原著一八九六年）『決定論のディレンマ』福鎌達夫訳、『ウィリアム・ジェイムズ著作集二 信ずる意志』日本教文社、一八八―二三七頁

デネット、ダニエル・C 二〇一五年『思考の技法——直観ポイントと77の思考術』阿部文彦、木島泰三訳、青土社
デネット、ダニエル・C 二〇二〇年『自由の余地』戸田山和久訳、名古屋大学出版会

モノー、ジャック 一九七二年『偶然と必然——現代生物学の思想的問いかけ』渡辺格、村上光彦訳、みすず書房

プラトン 一九七五年『ティマイオス』、種山恭子訳、『プラトン全集・第一二巻』岩波書店、一―二二五頁

ライプニッツ 一九九一年『ライプニッツ著作集七・宗教哲学「弁論論」下』下村寅太郎、山本信、中村幸四郎、原享吉監修、工作舎

ルクレーティウス 一九六一年『物の本質について』樋口勝彦訳、岩波文庫

渡辺慧 一九八〇年『生命と自由』岩波新書

欧語文献

Carone, Gabriela Roxana. 2005. *Plato's Cosmology and Its Ethical Dimensions*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.

Kane, Robert. 1996. *The Significance of Free Will*. New York: Oxford University Press.

Lowe E. J. 2008. *Personal Agency: The Metaphysics of Mind and Action*. Oxford: New York: Oxford University Press.

Spinoza, Benedictus de. 1925. *Spinoza Opera*. Carl Gebhardt ed. Heiderberg: Carl Winters, Universitätsbuchhandlung.